様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２００８１

研究課題名（和文）通常学級に在籍する特別な教育支援が必要な生徒に通じる球技指導方略の検討

研究課題名（英文）Examination of ball game instruction methods for students with special educational needs enrolled in regular classes

研究代表者
伊佐野　龍司（ISANO, Ryoji）

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：００７３４１１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は特別な教育的支援を必要とする生徒に通じる球技の指導方略を提案するために教育的支援が必要となる生徒が通う通信制高等学校において，３年間に渡る参与観察を実施した．その結果，体育教師には球技の教材を用いて①生徒の身体を介した関係性の構築②人・制度といった階層構造をなした働きかけを通して生徒のパトスを調整する実践知を有していると解された．また，ゴール型ボールゲームにおける「ボールを持たないときの動き」の身体図式を現象学的運動分析によって呈示した．これらの現象学に基づく意識や共感の仕組みを拠り所として導出した知見を援用することで，本研究が企図する球技の指導が実践可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
特別な教育的支援が必要となる生徒が集まる通信制高等学校において球技指導を通じた生徒の関係性構築に実績を上げる体育教師の実践知を開示することで，本研究が目的とする指導方略の適用を下支えする教師の専門性向上に貢献する．また，「ボールを持たないときの動き」の身体図式の呈示は，養成段階から学習者自身の動感発生様態を厳密に分析することを促進させることとなり，ひいては体育教師が具備するべき観察能力の向上に結実する．

研究成果の概要（英文）：In order to achieve the objectives of this study, I conducted three years of participant observation in a correspondence high school where students with educational support needs congregate. As a result, it was interpreted that physical education teachers have the practical knowledge to (1) build relationships through students' bodies and (2) adjust students' pathos through the hierarchical structure of people and institutions by using ball game materials. In addition, I clarified the structure of the body schema of "Off the Ball Movement" in ball games of the learners aspiring to become physical education teachers from a phenomenological viewpoint. I clarified the structure of the body schema of "Off the Ball Movement" in invasion-type ball games of the learners aspiring to become physical education teachers from a phenomenological viewpoint.By using these phenomenology-based findings, the ball game instruction that this study intends to implement can be put into practice.

研究分野：体育科教育学

キーワード：球技　身体　参与観察　共感　現象学　体育授業　体育教師

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在の学校教育では，在籍する児童・生徒一人一人の発達の段階や特性に応じた教育的ニーズと，それに応じたきめ細かい指導・支援が求められている．文部科学省（2012）も，通常学級に在籍する「知的発達に遅れはないが，学習面及び行動面で著しい困難を示す児童・生徒」の割合が 6.5%と報告している．また 2016 年に改定された中学校学習指導要領解説保健体育科編から，「指導計画の作成」において人間関係の形成など ASD/ADHD 等の発達障害を含む障害による生徒個々の学習の困難さ（以下，特別な教育的支援が必要な生徒）に応じた指導内容や指導方法を工夫することが記されている．これらは全教科で特別な教育的支援が課題を必要とする生徒への指導の充実が緊急性の高い課題であることを示唆している．

現在の学校体育のカリキュラムの多くの割合を球技領域が占めており，その学習指導には「ゲーム理解」や「戦術的な気づき」を促す Teaching Games for Understanding（以下，TGfU と称す）理論に端を発する「戦術学習」モデルが影響を与えている．そこでは特に，サッカー・バスケットボールなど相手方に侵入を企てるゴール型ゲームでは，得点に結びつけるために仲間との連携によってゴール前の「空間（スペース）」の作り方を中心的なテーマに掲げていた（Bunker and Thorpe，1982）．それは中学校学習指導要領解説保健体育編においても「空間に走りこむ」ことや「空間を作りだす」ことが反映されている．そのため，体育科教育学の領域では，TGfU モデルを基に3vs2 などの数的優位やルール変更を取り入れた「修正されたゲーム(modified game)」や L カットなどと命名された「特定の動き方」を用いて「戦術的気づき」が生まれやすい環境を意図的に設定し，その課題に取り組むことでスペース認識や状況判断力の育成や効果の検証に傾注してきた．こうした球技の研究は，ゲームにおいて課題となる典型的な状況の蓄積に加え、その際に必要となる技能の位置づけに貢献してきた．

しかしながら，一連の球技に関する研究成果の一方で，3vs2 のように練習で示された状況がゲーム全体の中で「いつ，どこで，どのように」出現するかは不確定であることに加え，練習内容のゲームへの再文脈化は生徒自身で行うことが前提となるため，ゲームの俯瞰的認識が未習熟な児童・生徒は困惑するばかりであった．ましてや自閉症スペクトラム障害（以下，ASD と称す）の特徴である「他者の意図に共感することや文脈を読むことが困難」である特別な教育的支援が課題を必要とする生徒にとっては，ゲーム状況や仲間の意図を読み取り連携することで，戦術的有利となるゴール前の「スペース」を作り出すことは困難を極める．そうした ASD の特徴が確認される生徒に対しては，個別の感覚指導の方略は提出されているが，集団による運動指導に関する研究は報告されていないのが現状であった．

２．研究の目的

本研究は，人々の身体に通底する意識・共感の仕組みを解決の拠所としてスペースの構造を再考し，特別な教育的支援を必要とする生徒にも通じる球技の指導方略を提示することを目的とする．この目的を達成するために，三つの研究課題を設定した．第一に，ゲームにおいて創出されるスペースの構造を意識・共感について取り扱う現象学的視座から考察する．第二に ASD 等の特別な教育的支援を必要とする生徒が通う学校の体育授業にてスペース創出を企図した指導実践，生徒の学習過程において生成された意味内容を現象学的視座から解釈する．第三に，スペース構造を踏まえた上で，問い多様な課題を有する生徒にも通底するゴール型ボールゲームの指導方略を提示する．

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために，設定された課題のうち，第一の課題については，ゴール型ボールゲームのスペース構造を現象学・人間学において用いられる方法を用いて考察する．また，第二の課題は，他者の意図に共感することや文脈を読むことが困難な生徒たちが多く在籍している通信制学校の体育授業においてスペース構成を企図した実践を図る．そして生徒の学習過程を臨床教育学等で用いられる参与観察法を用いて学習過程を観察・記録し，スペースの創出に向けて生成された意味内容を授業者と共に現象学的視座から解釈する．第三の課題については，スペース構成に焦点化した指導の中核となる「見方・考え方」を発生運動学に立脚した上で検討する．

４．研究成果

第一課題に応えるために，「ボールを持たないときの動き」の身体図式の呈示に着手した．本研究では，ボールゲームにおけるスペースがボール保持者とボールを持たないプレイヤーによる関係構造と捉え，プレイヤーの運動感覚意識がどのようにかたちづくられているか現象学的運動分析を実施した．なお，当該研究は，スペースを創出する上で重要とされる「ボールを持たないときの動き」の動感図式を，指導者養成機関所属の学習者による自己観察を通じて呈示することとした．これを達成するために，指導者養成機関における実技実習（サッカー）を履修する学習者の中から選出された A に自らの動感志向性の働きを観察する分析用紙の記入と共に借問を実施し，機能単位の抽出及び構造分析，発生分析を実施した．構造分析を通じて，A の「ボー

ルを持たないときの動き」が，3つの機能単位を含む類化形態がまとめられた．そして，Aの動感図式には類化形態に6つの類型化形態が確認された．さらに，切迫性の高低の中でも異なる動感志向性によって区別された．このボールを持たない動きの動感がかたちづくられるには，パスの出し手と受け手の構成された情況の合致が不可欠であった．また，発生分析を通じて，位置取りに対する意識やピッチ上の〈ここ〉を感じ取る意識，意識が向けられてはいないが感じ取られている〈ボールを持たない味方〉を捉えているといった直感の働きが顕となった．これらの情況投射化身体知の予感の背後で働く直感を捉えることで，Aの「ボールを持たないときの動き」が階層構造を持ち合わせた動感図式であることが明らかとなった．

続いて，第二・三課題に応えるために，長期に渡る参与観察によって開示された体育教師が有する実践知の開示に着手した．特別な教育支援が必要な生徒が通う通信制高校の体育授業を対象に3年間に渡り参与観察を実施した．体育教師は，卒業後の自立を見据えたうえで，授業において多様な場面で生徒間の相互作用を創出し，生徒の主体的選択の促進を図っていた．こうした生徒を相互の「関係のなかの自己」として捉えた体育教師の教育的営為は多様な方略が取られていたが，それは主として言語を通した相互作用ではなかった．そのため，本研究では，参与観察において記述された事柄を運動感覚的意識の発生分析を可能にする現象学を基底に据えながら，人間学的なパトス的運動世界も同時に分析の視野に入れた現象学的人間学の立場から検討することとした．それは体育授業における教師の教育的営為の意味や価値，そしてそこに内在するパトス的決断を読み取るとも言い換えられる．

当該視座に立脚した上で観察されたゴール型の授業において，教師は積極的な介入を行うことにも増して，毎時間活動に取り組むグループのメンバーを調整していた．すなわち，教師は特定の動き方を指導し，ゲームで再現することを求めるのではなく，パスの出し手と受け手の関係性を生徒自身で構成していく情況を創出していた．こうしたゲームを通じて関係性が構成される過程，いわばスペース創出の萌芽とも言える情況を長期の観察を通じて捉えることができた。本研究では，球技の教材を通じた身体的・物質的な経験が生徒の自己及び他者経験に結びついたと解された．別言すれば，〈私〉という固有領域をもちながらも〈他者〉との共通領域が身体的な次元でおこる間身体性を構造化していったと言えよう．こうした人間が本来保有する身体的な次元において関係性が構成されていったため，言語による相互作用が少なくとも生徒の主体的選択が促進されていた．これらを授業で実現できるよう体育教師は生徒の行動の基底となるパトスを調整するために，グループの構成やルール等の制度の設定等の層構造を成した働きかけを行なっていた．こうした体育教師による教育的営為は，教材の特性把握と共に，生徒が置かれている情況，関心，過去等々を踏まえた上で感知する共感能力と授業全体の見通しと段取り，省察して修正を図る即興性によって支えられていると解された．なお，これらを実践するためには，生徒らの情況やパトスを読み取ることが求められるため，学習過程や学習形態のマネジメント以上に教師の専門的力量やそれに裏付けられた教師の指導性，指導方略の重要性が一層明確となった．

以上，本研究を通じて，スペース創出に不可欠である「情況の構成」の過程と共に，その学びを下支えする「ボールを持たないときの動き」の身体図式，仲間との情況の構成を促進させる教師の実践知を知見として提示するに至った．こうした現象学に立脚し，人々の身体に通底する意識・共感の仕組みを援用することで，冒頭に示した行動科学的枠組みから示された学習方略とは別用の「通常学級に在籍する特別な教育支援が必要な生徒に通じる球技指導」が可能となる．体育科教育学領域においては当該立場に立脚した研究は蓄積が少なく，諸外国においても身体に着目した球技指導研究は個人へのアプローチが主流であった．集団を対象にした本研究の成果を基盤にすることで誰もが参加できるインクルーシヴな球技の学びが提案可能となる．今後は様々な学校種の体育授業と連携し，本研究の枠組みを援用した実践と知見を蓄積していくと共に，教師教育への拡大していくことに着手する．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 伊佐野龍司，阿部滉	４．巻 1
２．論文標題 保健体育教師の養成・育成を企図した実践から捉える大学との連携の意義	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大学地域連携学研究	６．最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土田了輔 ，伊佐野龍司	４．巻 6
２．論文標題 役割分担を内在する機能共同体的な文化の学習に関する考察―状況論とゲーム構造論に基づく教科的合理的配慮―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教師教育と実践知	６．最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 橋口 泰一，大嶽 真人，伊佐野 龍司，坂本 宗司，菅野 慎太郎，村上 重雄，内田 若希	４．巻 22
２．論文標題 スポーツボランティアの位置づけに関する探索的研究：視覚障害児のスポーツ体験プログラムを対象として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌	６．最初と最後の頁 67 - 74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 城間修平，伊佐野龍司	４．巻 5
２．論文標題 バスケットボールのファストブレイクにおける創発身体知の形成過程	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教師教育と実践知	６．最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ryoji Isano	4．巻 3
2．論文標題 A study on physical education curriculum and its issues in Japan	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Theory and Methods of Physical Education and Sports	6．最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32652/tmfvs.2020.3.3-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 橋口泰一，大嶽真人，伊佐野龍司，菅野慎太郎，内田若希	4．巻 33
2．論文標題 ブラインドサッカーにおけるトレーニング環境モデル構築に向けた実証的研究-クラブチームを対象とした人的・物的環境の調査-	5．発行年 2020年
3．雑誌名 バイオメディカル・ファジィ・システム学会論文集	6．最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊佐野龍司，大嶽真人，城間修平	4．巻 1
2．論文標題 ボールゲーム指導に関する研究の課題と方法をめぐる論議	5．発行年 2019年
3．雑誌名 身体と教育の実践知	6．最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋口泰一，大嶽真人，伊佐野龍司	4．巻 69
2．論文標題 視覚障害とスポーツ－ブラインドサッカーにおけるスポーツ心理学研究から－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 体育の科学	6．最初と最後の頁 430-434
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋口泰一，大嶽真人，伊佐野龍司，坂本宗司	４．巻 1
２．論文標題 ブラインドサッカーにおけるゴールキーパーの言語指示に関する探索的分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 身体と教育の実践知	６．最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊佐野龍司	４．巻 67
２．論文標題 保健の「技能」ってなあに	５．発行年 2019年
３．雑誌名 体育科教育	６．最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 城間修平，伊佐野龍司	４．巻 54
２．論文標題 バスケットボールにおけるファストブレイク攻撃に関する実践知-トップレベルで活躍するガードプレイヤーの「語り」を手がかりに-	５．発行年 2019年
３．雑誌名 桜門体育学研究	６．最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 城間修平，伊佐野龍司	４．巻 5
２．論文標題 バスケットボールのファストブレイクにおける創発身体知の形成過程	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教師教育と実践知	６．最初と最後の頁 11-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関慶太郎，松原拓矢，井川純一，伊佐野龍司，青山清英	４．巻 1
２．論文標題 投能力向上のための学習プログラムが女子中学生の投能力と動作に及ぼす影響	５．発行年 2019年
３．雑誌名 身体と教育の実践知	６．最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本道慎吾，伊佐野龍司，青山清英	４．巻 1
２．論文標題 ハードル走の学習における運動内観報告の内容に関する運動学的考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 身体と教育の実践知	６．最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 伊佐野龍司
２．発表標題 通常学級に在籍する特別な配慮を必要とする生徒に通じる 体育教師の実践的知識 -高等学校体育授業における一事例を対象にして-
３．学会等名 桜門体育学会第11回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊佐野龍司，大嶽真人，橋口泰一，坂本宗司，小林法爾実
２．発表標題 ブラインドサッカー選手に対する全身振動刺激のトレーニングがステップ運動に及ぼす影響
３．学会等名 東京体育学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

1．著者名 今村修，植田誠治，岡崎勝博，野津有司，野村良和，森良一，上地勝，横嶋剛，物部博文，長岡和，今関豊一，七木田文彦，山本浩二，岡出美則，荒井信成，藤原昌太，西岡伸紀，伊佐野龍司，助友裕子，木原慎介，片岡千恵，岩田英樹，久保元芳，小浜明，徐広孝，杉崎弘周，佐美由紀子，赤田信一，菅沼徳夫，山合洋人，渡部基，山田浩平	4．発行年 2020年
2．出版社 大修館書店	5．総ページ数 324
3．書名 保健科教育学の探究-研究の基礎と方法-	

1．著者名 高橋正則，長澤純一，松本惠，水上博司，青山清英，井川純一，伊佐野龍司，大嶽真人，川井良介，櫛英彦，小山貴之，金野潤，城間修平，鈴木理，関慶太郎，土屋弥生，野口智博，水落文夫，水島宏一，吉田明子，糸数陽一，木村敬一，齋藤理，篠山竜青，田中和仁，橋口泰一，三井梨沙子	4．発行年 2020年
2．出版社 八千代出版	5．総ページ数 200
3．書名 大学生のための 最新 健康・スポーツ科学	

1．著者名 村上重雄 ， 大嶽真人 ， 橋口泰一 ， 伊佐野龍司 ， 菅野慎太郎	4．発行年 2020年
2．出版社 日本ブライドサッカー協会　女子日本代表チーム部	5．総ページ数 48
3．書名 ブラインドサッカー女子日本代表2019-220活動報告	

1．著者名 渡邉正樹，伊佐野龍司，桜井愛子，高橋宗良，原洋子，久田孝，藤原忠雄，南川和宣，森純子	4．発行年 2019年
2．出版社 大修館書店	5．総ページ数 270
3．書名 学校安全と危機管理 三訂版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関